

- 2020年度の検討を受け、当事者参画型開発のノウハウの整理を開始した。
- 2021年度には、当事者と企業の共創に関する既存のノウハウを一覧化し、2022年度には、実践から得た学びやヒアリング等に基づいてブラッシュアップした手引きを作成した。

2020年度WGでの検討内容

開発段階の当事者の参画・協力に向けた課題と解決の切り口として、認知症分野での「当事者主導型研究（User-led Research）」を検討

「開発段階からの当事者参画の仕組み」を試行・実践し、ノウハウを整理することで、当事者参画の仕組みを普及していくきっかけをつくる

2021年度

既存のノウハウ一覧表を作成

- ・ 認知症未来共創ハブの協力のもと、当事者と企業の共創に関する既存のノウハウを一覧化

2022年度

企業向け手引きを作成

- ・ 既存のノウハウ一覧表（2021年度成果物）に加えて、当事者参画型開発の実践企業のプロトタイプングから得られた経験知や関係者へのヒアリング等の結果をふまえ、リーフレット形式の手引きを作成

① 当事者参画型開発の
実践から得た学び
② 関係者へのヒアリング等
に基づきブラッシュアップ

（ヒアリング等にご協力いただいた関係者の皆様）

- ◆ 当事者参画の取組を実施している企業 4社
- ◆ 一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ 代表理事 藤田 和子様
- ◆ 一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ 丹野 智文様
- ◆ 公益社団法人 認知症の人と家族の会 代表理事 鈴木 森夫様
- ◆ 慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科 教授 堀田 聡子様
- ◆ 株式会社マネーフォワード 執行役員CoPA Fintech研究所長 瀧 俊雄様
- ◆ 認知症介護研究・研修東京センター 研究部長 永田久美子様
- ◆ 京都府、福岡市、大和市、名古屋市 ご担当者様
- ◆ NPO法人マイway ご担当者様

企業向け手引きの概要

- 認知症の人との共創にあたって必要な視点や当事者参画型開発の手法、当事者参画型開発のプロセスにおける留意点等を整理した企業向けの手引きを作成した。

対象者

- ・ 認知症当事者との共創・当事者参画型開発に取り組む企業の開発担当者、マーケティング担当者
- ・ 上記のような立場の人々を支援する企業のリサーチャー・インタビュアー
- ・ 認知症の人の支援団体や自治体の担当者 等

目的、伝えたいこと

- ・ 認知症の人と対話し、互いに心地よく、楽しみながら、当事者参画型開発を意義のあるものにしていくために必要な視点
- ・ 「当事者参画型開発」に取り組む場合の方法論・ノウハウ

主な内容

- ・ 当事者参画型開発の意義
- ・ 認知症の基礎知識
- ・ 当事者（本人）とご一緒するときのキホン
- ・ 当事者参画の7つの手法
- ・ 当事者参画型開発のプロセス、プロセスごとの留意点
- ・ 参考情報

企業向け手引き イメージ

当事者参画型開発の手引き（案）

経済産業省 認知症官民協議会
認知症イノベーションアライアンスワーキンググループ
2022年度

一般的な開発プロセスと当事者参画型開発のプロセス

Episode 「開発のどのステップで一緒にできるといいんだろう？」



一般的な製品・サービスの開発プロセスはよく知っているけれど、どのステップに当事者参画型開発のプロセスを組み込み、どのような流れで進めていくのか悩んでいるツトムさん。必要なステップで、できるだけ効果的に取り入れたいけれど…。

一般的な開発プロセスと当事者参画型開発のプロセスの関係性

一般的な開発プロセス



当事者（本人）の参画は、会社としての意思決定が必要な場面以外であれば、どのようなステップでも可能です。どこかにスポット的に参画してもらうことももちろん良いですが、継続して参画してもらい、関係性をつくっていくことで見てくることもあるはずです。

当事者（本人）に参画してもらう方法

Episode 「具体的にどんな風に当事者（本人）と一緒にできるんだろう？」



トモミさんから当事者（本人）との接するキホンを聞き、一般的な開発プロセスへの取り入れ方も理解し、社内で当事者参画型のプロジェクトを提案するべく準備を進めるツトムさん。しかし、具体的に形にしていけるプロセスでどんな風に当事者（本人）に参画していただくのか、まだまだイメージが湧かないようです。

当事者参画の7つの手法

ここでは、7つの手法と、各手法において認知症の人とご一緒する際に留意しておきたいポイントをご紹介します。これらの手法は一から順に行うのではなく、開発のステップに選んだ方法。また、参画してもらった当事者（本人）が希望する方法を実践します。

- 手法1 One to one インタビュー（デプスインタビュー）
- 手法2 座談会（グループインタビュー）
- 手法3 行動観察
- 手法4 試作品ユーザーテスト
- 手法5 ワークショップ
- 手法6 日記・記録式調査
- 手法7 アンケート調査

いずれの方法も、会場までの移動の負担があることを考慮しましょう。また、支援者や家族のサポートが必要な場合があります。その場合は、手法に取り組む前に同行者の有無を確認し、その方と連携して準備をします。

企業向け手引きの構成

<目次>

本手引き作成の理由

当事者参画型開発の意義

認知症についての基礎知識

当事者参画型開発をはじめるにあたってのキホン

一般的な開発プロセスと当事者参画型開発のプロセス

当事者（本人）に参画してもらう手法

当事者参画型開発のプロセス1：当事者（本人）と出会う

当事者参画型開発のプロセス2：企画の目的・内容を伝える

当事者参画型開発のプロセス3：参画していただく際の事前準備

当事者参画型開発のプロセス4：当事者参画を実践する

4-1 コミュニケーションの工夫

4-2 空間づくりの工夫

4-3 資料づくりの工夫

4-4 オンライン開催の工夫

当事者参画型開発のプロセス5：フィードバック

認知症の人の視点や暮らしの様子を学ぶための参考情報

<7つの参画手法>

各手法において、特に認知症の人と共創する場合の留意したいポイントやその手法を取り入れたいタイミングを紹介

- One to one インタビュー（デプスインタビュー）
- 座談会（グループインタビュー）
- 行動観察・同行調査
- 試作品・製品ユーザーテスト
- ワークショップ
- 日記・記録式調査
- アンケート調査

<5つの共創プロセス>

まず当事者（本人）とどう出会うのかといったスタートから、準備段階を踏まえた当事者参画の実践方法、実践後のフィードバックまでのプロセスを紹介

さらに、当事者（本人）とご一緒する際に留意したいポイントをプロセスごとに整理。どのように留意すべきなのか、それがなぜ必要なのかを掲載

企業向け手引き作成のポイント

<ポイント>

実際にこれまで、当事者参画型開発に取り組んだことのある企業の経験者や当事者（本人）、支援者へのインタビューを通して伺った内容を参考例として紹介

当事者参画型開発のプロセス1：当事者（本人）と出会う

認知症の人と出会った方法

開かれている場を訪れる以外にも、認知症の人をこちらから探し、直接お話の時間をいただくというアプローチも可能です。ここでは、実際に企業の方が実践された出会い方をご紹介します。



社内の一斉メールやチャットグループでプロジェクトのことを書いてみたら、認知症の人が家族にいる社員が協力したいと手を挙げてくれた！



認知症についての書籍を出版している医療の専門職の人にアポイントをとってみたら、一度相談に乗ってもらえることに！



SNS等で認知症であることを公表し、発信・活動している方にダイレクトメッセージをしてお話しする機会をもらった。



当事者（本人）が登壇する講演会に参加。講演会の後、主催の方に頼んで、ご挨拶をさせてもらい、後日改めて時間をいただくお願いができた。



最初から「企業の人」対「ユーザー・対象者」として出会うのではなく、まずは「人」対「人」として知り合い、一緒に過ごす時間をつくるのが大切です。本やネットで知識を学ぶことも必要ですが、人によって症状も暮らし方も全く違います。出会う人数が多ければ多いほど、新たな発見があるはずですよ。

ともに取り組む方と出会う

当たり前のことですが、認知症の人は、お一人おひとり暮らしの様子も好きなことや関心のあることも違います。「認知症の人」と一括りにして、参画してもらう方のイメージを絞らず、どなたでもいいとお願いするのではなかなかうまく進みません。

取り組みたいテーマやプロジェクトの内容に興味関心を寄せてもらえる方、当事者（本人）の経験を生かすことができる方を想定し、具体的にどのような方と一緒に取り組むかを考えてみます。

料理の段取りが難しくなっている方でも
使いやすいキッチングッズを考えたい…。



昔から料理が好きで、家族や親戚に振舞うことが大好きでした。
認知症になってからは、少しずつ料理をすることが難しくなってきたけれど、できるだけ自分で料理をしたい！

記憶障害のある方に役立つ
メッセージアプリの開発に参加してほしい！



営業経験があるので、お話しすることが好きだし、
人とのやりとりは得意！

身体がうまく動かせない方でも、
着脱しやすい洋服を考えたい…。



夫婦や友達同士でお出かけすることが楽しみ。
認知症になってからは、着替えに時間がかかるようになってきたけれど、これからもいろんなところに行きたい！

企業向け手引き作成のポイント

<ポイント>

会場づくりや資料づくり、オンラインでの開催などにおける留意ポイントを、実際の場面で取り組みやすいよう、具体的にイラストを使って説明

当事者参画型開発のプロセス4-2：空間づくりの工夫

③ 刺激になるような匂いがないようにする

理由>嗅覚が敏感になる場合があるため

④ 会場の室温は適温を保ち、ブランケット等で調整可能に

理由>体温や汗の調節が難しい場合があるため

⑥ 状況に適した明るさを確保する

⑦ 明るさを調節する際は急激な変化を避ける・声を掛ける

⑧ スポットライトや直射日光など、眩しい光を抑える

理由>光が目には刺さるように痛みとして感じる場合があるため

⑨ 混乱を招くような影や模様がないようにする

理由>影やマットが穴に見えたり、床の模様で平面が歪んで見え歩行が難しくなる場合があるため

⑩ 複数のグループを作る場合は、テーブルの間隔をあける

⑪ マイクやBGMの音量を適切にし、スピーカー付近の席は避ける

⑫ 音が反響しないようにする

理由>大きな音に敏感になる、騒がしさを集中が切れる場合があるため

⑬ 座席の位置は移動できるようにしておく

理由>明るさや音の調節など、ご本人が会場に到着しないとわからないこともあるため

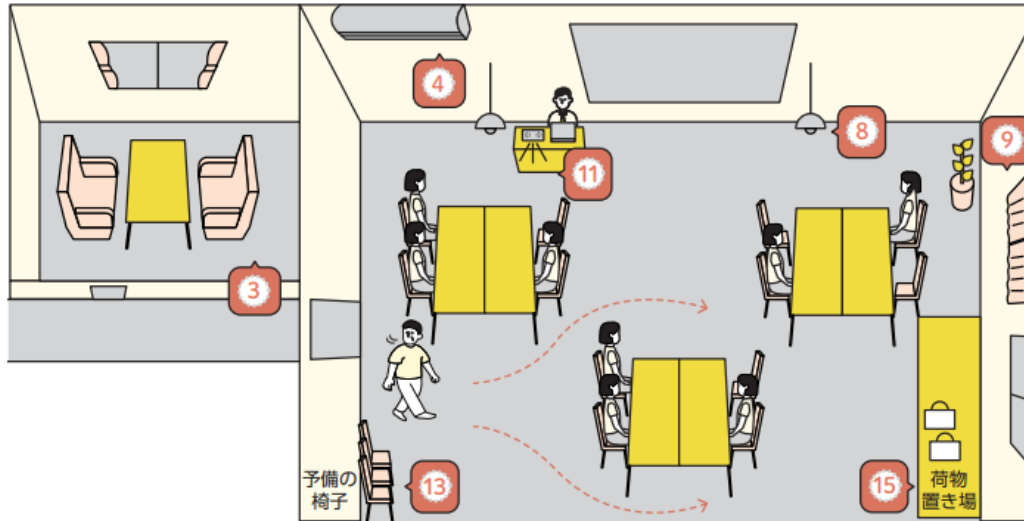
⑭ 支援者や家族が同席する場合の座席位置は相談して決める

⑮ 会場内は整理整頓し、移動しやすいスペースをつくる

理由>狭い場所では体が動かしにくい場合があるため

⑤ 別部屋・仕切りなどで休憩できる場所をつくる

理由>疲れやすい場合があるため



当事者（本人）に苦しいことや不安なことがあるか事前に尋ね、できる限りの配慮をすることは大切です。ただし、実際の会場に来てみないとわからないことや当日の体調によって変化することもあります。そのため、臨機応変に調整できる場づくりやサポート体制をつくりたいものです。